

高畑勲監督と江戸写し絵

テレビの訃報速報に、高畑勲さんの名前を見た。

まさか、とやはり、との思いが去来した。十日ほど前に、高畑さんと電話で話をしたばかりだったからである。

みんわ座は、小学校を巡回して五十年になる。一方、衰えていた日本の伝統映像芸能「写し絵」を復活、上演して二十年経った。写し絵は海外公演で評価は高いが、日本国内での知名度は極めて低い。そこで、営業実績のある一般社団法人「国際フェローシップ・アーツ」に「写し絵」部門の営業をお願いすることになった。劇団みんわ座が演じる「写し絵」では、児童劇のいちジャンルとして見なされる向きも多かった。そこで伝統芸能を演じる「写し絵部門」を組織として独立する案が浮上し、「江戸写し絵社中」として旗揚げすることになった。その旗揚げ公演の作品を、高畑勲さんに依頼してはどうか、との案が浮上した。候補作品に「一寸法師」を想定し、依頼する詳しい手紙を書いた後に、高畑さんに相談の電話を差し入れた。

電話に出た高畑勲さんは「健康に問題が無ければ嬉しい話ですが・・・」と、弱弱しくはない、普段の声で、病気の現状を話してくれた。私からは「健康を回復されたら、その時に考えて下さい」と電話を交わしたの十日前だったのである。

高畑監督との出会いは、二十年前に遡る。

みんわ座の写し絵復活初演は一九九八年である。その翌年八月、高畑勲さんが企画した「絵巻物―アニメの源流」展が、千葉市立美術館で開催された。そのイベントに、みんわ座の写し絵が招かれ「一の谷嫩軍記」を上演した。まだ世に知られていない「写し絵」を、公演企画を立ててくれた最初が高畑さんだった。

その後、東京芸術劇場の公演パンフレットに原稿を頂いたり、いろいろな出会いがあった。早稲田大学の草原真知子教授から、毎年暮れに来日する、カリフォルニア大学ロス校で映像研究をしている「エルキ フータモ教授」を紹介された。写し絵の上演を観て貰ってから昵懇になった。そのフータモさんを私が高畑さんに紹介し、草原教授宅で歓談の時間を設けた。午後から夕方にかけて、芸術家と映像研究者の濃密な時間であった。駅へ帰る道すがら高畑さんは、「フータモさんの日本人と異なる感性、学者の視点、創造者としてとても参考になった」と喜んでくれた。その「エルキ フータモ」さんがある時、「映画芸術科学アカデミー」へ写し絵の上演企画書を提出してきたよ」とさりげなく言った。

ロス校の教授だから、地元大学の教授である。私は信じられない顔をしていたのだが、二年後に実現した。条件は、「アメリカ初演が、映画芸術科学アカデミーであること」だった。発売初日に、写し絵の切符は完売した。二〇〇八年七月四日、上演した「リンウッド ダン劇場」では、終演でスタンディングオベーションが長く続き、司会者が手を広げてようやく客席が鎮った。

写し絵のルーツは「西欧のマジックランタン」である。しかし、この日演じた「写し絵は」ルーツとなった「マジックランタン」とは著しく表現が異なる日本独特の技法である。

フータモ氏や草原教授のアドバイスを受けて、スクリーンの舞台裏を開放し、投影器を手を持ち、映像の「絡繰り」を体験する場にした。観客は長い列を作って並び、だるまを転がし、手足を出したり引いたりし、幽霊をスクリーンから飛び出して客席を走らせて歓声をあげ初

めて触れた、絡繰り仕掛けを堪能していました。

「映画芸術科学アカデミー」では「写し絵は、世界映画史の最初におかれるべき優れたものである」との望外の評価を得た。

帰国後、高畑さんに、フータモ教授の骨折りで、ハリウッド公演を行い、大成功でした、と報告しました。それについて「フータモさんが動いてくれましたか。仲間は嬉しいですね。写し絵の成功は、わがことのように嬉しい」と話してくれました。

「江戸写し絵社中」旗揚げ公演、もし病気が回復したら、観に行けるかも……」

「はい。まずはお元気になられて下さい」と電話を切った。

今は、長く写し絵を見守って頂いた感謝と、ご冥福を祈るばかりです。

合掌、